

## 主 題：あなたは何を最優先しますか？ 2

聖書箇所：コリント人への手紙第一 9章1-18節

クリスチャンが最も優先しなければならないもの、それは神の栄光が現わされることであり、それ故、私たちは神のみこころを求めて行かなければならないのです。確かに、私たちには自由が与えられています。選択の自由があります。しかし、だからこそ、私たちはどうすることがより神に喜んでいただけるのかということをよく考えるべきなのです。パウロにも自由がありました。様々な選択をすることができました。そして、コリント教会からの献金を受け取って、伝道以外の自分の仕事を削って福音を宣べ伝えたり、救われたクリスチャンたちを教え導いたりすることに専念することもできました。しかし、パウロは敢えてそのようにはしませんでした。なぜなら、もっとすばらしい選択があると考えていたからです。単にことばで福音を伝えること以上に優先したいことがあったのです。

前回に続いて、私たちはパウロが偶像にささげた肉に関する問題の中で挙げた、彼自身の証（それは優先順位についての証ですが）を見て行くことによって、私たちが見習うべきこと、模範とするべきことを学んで行きたいと思えます。そうすることによって、私たちが益々価値あるよりすばらしい選択ができる者となって行くことを願います。

## ☆特別な権威と自由が与えられたパウロが最優先したものとは？

## 1. 周りへの証 1-12節

前回学んだことです。パウロは自分が語ることば以上に、自分の生き方こそ神を証するものであるように願いました。そのために、コリント教会からサポートを受けることは周りに対する証にならない、もしかすると、キリストが用意してくださった福音におおいをかけることになるかもしれないと考えたのです。彼にとって「福音を語る」ことはことばだけのものではなく、行ないをも伴ったものであったのです。パウロは自分が「使徒」の資格を十分備えていることをはっきり証明しました。そして、権利を主張できる具体的な例を6つ上げて、自分も本来なら当然、教会からのサポートを受けるべき権利があることを主張するのです。しかし、彼はコリント教会に対して自分の権利を主張しませんでした。それは「キリストの福音のゆえ」でした。「**キリストの福音に少しの妨げも与えまいとして、…**」（12節）それがパウロの一番の関心事だったのです。キリストの救いを少しでも多くの人に、また、少しでも良い状態で提供して行くこと、それがパウロにとって重要なことだったのです。同様に、私たちも熱心に伝道し、大胆に福音を語っても、その生き方が神を優先しないでこの世と妥協し、いい加減に生きてしまっているなら、神は力ある証人として用いてはくださらないことを覚えるべきです。周りの人たちは私たちの神に対する態度を見ているのですから…。

今日は続いて13節から見て行きましょう。

## 2. 神にだけ仕えること 13-15節

13-15節「**あなたがたは、宮に奉仕している者が宮の物を食べ、祭壇に仕える者が祭壇の物にあずかることを知らないのですか。:14 同じように、主も、福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活のささえを得るように定めておられます。:15 しかし、私はこれらの権利の一つも用いませんでした。また、私は自分がそうされたくてこのように書いているのでもありません。私は自分の誇りをだれかに奪われるよりは、死んだほうがましだからです。**」。パウロが様々な自由や数ある選択の中で、特に優先したものの第2番目は「神にだけ仕える」ということでした。お金や名誉などではなく、ただ、この神にだけ私は仕えたいと、そういう思いがパウロにはあったのです。どうしてそう言えるのか、みことばを見て行きましょう。

## ●当然、サポート（報酬）を受けるべき例証

13-14節で彼はもう一度、本来なら自分は報酬を受ける権利があることを、二つの例証を用いて訴えています。それは（1）神殿で仕えている者＝この当時、「宮」つまり、神殿において神に奉仕する仕事をしてきた人たち、祭司やレビ人がいました。その人たちは神殿や祭壇に捧げられたものを食べていました。それは、古くモーセの時代から続いていることであって、何より、神からの教え、命令であったのです。（レビ記6：16、26、7：6、31-、民数記5：9-10などを見てください。）当時、このようなことはごく自然なことであって、だれでも知っていることだったのです。もう一つは14節にあるように（2）福音を宣べ伝える者＝ここでパウロは「主」、つまりイエス・キリストが「**福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活のささえを得るように**」お定めになったと教えています。マタイの福音書10：10を見ましょう。これはイエスが十二弟子を任命して遣わされる場所ですが、そこでイエスは弟子たちにこのように言われました。「**旅行用の袋も、二枚目の下着も、くつも、杖も持たずに行きなさい。働く者が食べ物を与えられるのは当然だからです。**」と、余分なものは持たなくてもよいと言われるの

です。また、パウロも同じことをIテモテ5：17-18でこのように教えています。「よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えのためにほねおっている長老は特にそうです。：18 聖書に「穀物をこなしている牛に、くつこを掛けてはいけません。」また、「働き手が報酬を受けることは当然である。」と言われているからです。」。

これらは前回学んだ例証（兵士、ぶどう園主、羊飼い、穀物をこなしている牛、耕す者、脱穀する者など）よりも、もっとパウロの状況に近いものであり、神からの明確な勧めがあり、神のご用に従事している者にはサポートを受ける資格が十分にあることを言っているのです。

#### ●パウロがサポートを受けようとしなかった理由

受ける資格があるのにパウロはサポートを受けなかった、それは「自分の誇り」のゆえだと言います。15節に「私は自分の誇りをだれかに奪われるよりは、死んだほうがましだからです。」と言っています。ここまで言い切るパウロのことばによって、どうしてパウロがここまで頑なにコリント教会からのサポートを受けようとしなかったかというその意志の強さがうかがえます。パウロの言う「誇り」とは何でしょう？確かに、パウロは「ですから、だれも人間を誇ってはいけません。…」(Iコリント3：21)と教えています。Iコリント1章を見ると、ここでパウロは、この世の知恵や自分たちの知恵を誇る者に対して1：31でエレミヤ9：23-24のみことばを引用して「まさしく、「誇る者は主にあって誇れ。」と書かれているとおりになるためです。」と記しています。また、ローマ15：17を見ると「それで、神に仕えることに関して、私はキリスト・イエスにあって誇りを持っているのです。」とあり、彼の誇りは「主に仕えること」、主に用いられることが許されていることだと分かります。

#### ●私たちにある誘惑とは何でしょう？

それは「神以外のものに仕えてしまうこと」です。「自分の誇りをだれかに奪われるよりは」とパウロは言っていますが、一体、だれがパウロからそのような誇り（神に仕えるということ）を奪うのでしょうか？彼は全知全能の神を信じていたのですから、たとえ、彼がいかなる理由で捕らえられようと、それは神のご計画の内であるという確信をもってはいたはずです。実は、イエスがこのような警告を与えておられます。マタイ6：24「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」と。私たち人間には絶えずこのような誘惑があるのです。「神に仕えるのか、それとも、富に仕えるのか？」ということで、それは神以外のものに仕えてしまう誘惑です。ですから、イエスはマタイ6：19-20で「自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。：20 自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。」と教え、その後で6：25「だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。」という勧めがあるのです。パウロはそのような誘惑の危険があることをよく知っていました。だからこそ、それを警戒していたのでしょうか。

また、パウロが報酬を受け取らなかった一つの理由は、恐らく、彼が「神にだけ仕えている」ということを証したかったからではないでしょうか？援助を受けることでお金の仕えている（お金のために働いている）という印象を与え誤解を生むことを避けたのではないのでしょうか？というのは、この当時、様々な異教の宣教師たちがお金目当てに働いていたからです。今でもそのような例が多くあります。お金のためだけに神のこをもち出したりすることが…。また、この当時、多くの奴隷たちがいたために、「労働は卑しいこと」とされていました。当時のギリシャのある人たちは肉体労働を軽蔑し、自由人といわれる人たちは汗水流して労働しようとはしなかったのです。この時代より少し前ですが、アリストテレスは、すべての人間は二つに分けられる、一つは教養のある賢人、もう一つは木を切る、水を汲むなど、つまり、他人のために従事する運命にある人たちだと言ったそうです。

パウロは福音宣教という働きだけでなく、天幕作りという肉体労働をすることによって、それこそ汗水流して神にお仕えすること、神のために働けることを喜んでいて、それだけでなく、それが彼の誇りでもあったのです。私たちはどうでしょう？この世にあつていろいろな仕事をしているとしても、究極的に私はこの神にだけ仕えている、神以外のものは私の主人ではない、もし誰かが私のこの誇りを奪うなら私は死んだほうがましだと、そのように私たちは告白できるのでしょうか？パウロはそこまで告白し、またそのことを人に分かってもらいたかったのです。福音をはっきり正しく伝えるためです。

### 3. 喜んで福音を伝えること 16-18節

16-18節「というのは、私が福音を宣べ伝えても、それは私の誇りにはなりません。そのことは、私がどうしても、しなければならぬことだからです。もし福音を宣べ伝えなかったら、私はわざわざ会いませぬ。：17 もし私がこれを自発的にしているのなら、報いがありませぬ。しかし、強いられたにしても、私には務めがゆだね

られているのです。:18 では、私にどんな報いがあるのでしょうか。それは、福音を宣べ伝えるときに報酬を求めないで与え、福音の働きによって持つ自分の権利を十分に用いないことなのです。」。パウロが特に優先したものの第3番目は「喜んで福音を伝える」ということでした。喜びをもって、自発的に福音を伝えることをパウロは心がけていたのです。

#### ● 選択の余地さえないパウロの使命とは？

16節で「**というのは、私が福音を宣べ伝えても、それは私の誇りにはなりません。**」と、自分が福音を伝えていることは自分自身の誇りではないと言っています。というのは前回も見たように、彼はその働きのために神から特別に選り分けられ、凄まじいまでに多くの場所で、多くの人たちに福音を語って行き、実に多くの人たちが救われていったのですが、これは自分の誇りではない、それは必ず自分がしなければならない使命だから、選択の余地などない使命だからと彼は言うのです。また、この箇所でもパウロは触れていませんが、1コリント2:1-5で語っていたように、パウロ自身の知恵や力で多くの人たちが救われていったのではなく、御霊なる神の結んでくださった実であるということもパウロは十分承知していたのです。16節の終わりに「**もし福音を宣べ伝えなかったら、私はわざわざに会います。**」とパウロは言っています。彼は自分に託されたその責任の大きさ、福音のすばらしさを考えたとき、この福音を自分だけに留めておくことがどれほど大きな損失であるかをよく知っていました。エゼキエル3:17-19にはこのように記されています。「**人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの家の見張り人とした。あなたは、わたしの口からことばを聞くとき、わたしに代わって彼らに警告を与えよ。:18 わたしが悪者に、『あなたは必ず死ぬ。』と言うとき、もしあなたが彼に警告を与えず、悪者に悪の道から離れて生きのびるように語って、警告しないなら、その悪者は自分の不義のために死ぬ。そして、わたしは彼の血の責任をあなたに問う。:19 もしあなたが悪者に警告を与えても、彼がその悪を悔い改めず、その悪の道から立ち返らないなら、彼は自分の不義のために死ななければならない。しかしあなたは自分のいのちを救うことになる。』**」と、ここで言われていることは「自分に与えられた神からのメッセージを正しく伝えて、警告を与えなさい!」ということなのです。もしあなたが警告を与えてもその者が従わないなら、その責任はあなたにはない、しかし、もしあなたが神からのメッセージを知っていながら、罪を犯している者に警告を発しないなら、神があなたに責任を問うというのです。同じエゼキエル33:7-9, 11でも同じことが警告されています。もし、私たちが自分の知っていることを自分のうちにだけ留めて、周りに必要な警告を与えないのなら、その責任の一端は私たちにもあるのです。パウロはそのことをよく分かっていたのです。

#### ● 自発的、かつ報酬なしに福音を伝えることによって与えられる報いとは？

17節に「**もし私がこれを自発的にしているのなら、報いがありましょう。しかし、強いられたにしても、私には務めがゆだねられているのです。**」と、パウロは自分には選択の余地がないと言いつつも福音宣教の動機に触れていますが、それを自発的にするが故の報いについて18節で「**では、私にどんな報いがあるのでしょうか。それは、福音を宣べ伝えるときに報酬を求めないで与え、福音の働きによって持つ自分の権利を十分に用いないことなのです。**」と語っています。パウロがここで言っている報いとは、パウロ自身が何の報酬もなしに福音宣教をし、それゆえに持つ自分の権利さえも主張しないということなのです。これはいったいどういうことなのでしょう？普通、報いとは何かがあることです。この場合でも何かそれなりの報酬があつてしかるべきですが、パウロは何もないことが報酬であり、あるべき権利を主張しないことが報いであるというのです。つまり、もし、私たちが頂くべき報酬を受け取ってしまったなら、「貸し借りが無い」という意味において、報酬を受け取ることによって相手との関係が対等になってしまいます。パウロは自分と神との関係においてそのようなにはなりたくなかったのです。彼は神に対して何ものにも代え難い感謝をもっていたのです。パウロは、自分に与えられているすばらしい恵みのゆえに、かつては滅びに向かっていた自分を救い、神に仕えるという誇りを与え、自分の生きるべき目的を与え、すばらしい務めに任じてくださった神に対して、感謝＝犠牲をささげたかったのです。だから、パウロは報いを受け取りたくなかったのです。このことは私たちにもよく理解できることではないでしょうか？私たちが何かすばらしいものを与えられた、それに対してどのように感謝しても仕切れない思い、それが神に対する思いであるならいっそうどんなに犠牲を払ってお捧げしても借りを返すことはできないと、まさにパウロはそのような思いでいたのです。だから、パウロはこの福音宣教という働きのためにすべてを捧げて従事しているけれど、それは選択の余地のないことであり、それに対する報酬などまったく考えていない、むしろ、報酬が与えられないことの方がうれしい、神に何かを捧げることができたことになるから…と言うのです。パウロはこのように神に対する感謝のゆえに犠牲を払いたい、何かをお捧げしたいと、そのような思いだったのです。

さて、私たちはどうでしょうか？パウロは自分の誇りを奪われるくらいなら死んだほうがまだとまで言い切りました。神のために働くことができる、神に用いていただくことができるというのは、パウロにとって最高の喜びでした。皆さんは喜んでおられますか？今日、神を礼拝できることを、神と個人的

な関係にあることを、神のために働けることを、神に何かをお捧げできることを、パウロのようにこれほどまでに喜んでおられますか？私たちは自分の犠牲や奉仕に対して、何かの見返りを求めているのでしょうか？また、周りの評価や敬意を求めてしていないのでしょうか？もしそうなら、今日学んだパウロの願いとはまったく反対のところに自分はいるということに気付かなければいけません。確かに、私たちはいろいろな奉仕をしています。伝道し、証もしています。しかし、私たちはそれを主にあって誇りとし、喜びをもってしているのでしょうか？もし、単なる義務感や責任感からしているなら、自分自身の信仰を吟味しなければいけません。パウロが願ったこと、パウロが最も重きをおいたことは、ことばだけでなく、自分の生き方をもって積極的に為して行く証です。もしかすると私の証も用いられるかもしれないというような消極的な証ではなく、積極的に、自分の生き方を見てください、自分が何を優先しているのかを知ってくださいと、そのような証を用い、神に仕えることが最高の喜びであり、もし、神以外のものに仕えるというそのような誘惑に陥ってしまうなら、私はもう生きている価値がないと、そして、最後に、喜びをもって自発的に見返りを期待することなしに、神に仕えて行きたいと、それがパウロの信仰でした。私たちもそのような歩みを為して行くことができると願います。